

カノコソウの栽培について

～ヤマトトウキに続く新規薬用作物の産地への導入を目指して～

農業研究開発センター大和野菜研究センターでは、伝統あるヤマトトウキに続く本県に適した薬用作物の検索を進めています。ここでは、カノコソウの栽培について検討した結果を報告します。

1. 背景と目的

カノコソウは、オミナエシ科の植物で、日本を含む東アジアに自生しています（図1）。根を乾燥させた生薬の和名を「吉草根（きっそうこん）」といい、婦人用薬や鎮静薬として用いられます。特有の強い匂いがあります。

生薬原料としてはおもに国内産が用いられ、北海道や岩手県など北日本で生産されています。原料生薬の中では比較的高単価で取引されていますが、まとまった産地がなく、安定した国内原料供給が強く求められています。カノコソウは、通常、秋に株分けした種苗を定植し、翌秋に収穫するため（図2）、収穫物のなかから一定量を種苗用に確保する必要があり、その分、出荷量は減少します。小さく株分けして植え付けると種苗必要量は減らせますが、収量への影響が懸念されます。そこで、大和野菜研究センター（標高 352m、宇陀市榛原三宮寺）において、効率的に増殖できる種苗の大きさについて検討しました。



図1 カノコソウ(左:花 中:乾燥根 右:栽培ほ場)

月	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1年目									●	
2年目									×	

● : 定植 × : 収穫

図2 カノコソウの栽培暦

2. 研究成果の概要

カノコソウの定植株の大きさは、新鮮重で通常 10g～30g 程度とされています。

定植方法として、新鮮重 30～50g、10g～30g、5g の慣行植え（株間 25cm、2条千鳥）及び 5g の密植植え（株間 12.5cm、2条千鳥）の4種類を比較栽培しました。その結果、いずれの方法を用いても収量に大差がないことが分かりました（図3）。増殖効率でみた場合、30～50g 慣行植えが 6.3 倍で最小、5g 慣行植えが 43.8 倍で最大となりました。30g～50g 慣行植えに比べ 5g 慣行植えではやや収量が低下する傾向がみられますが、5g の株でも密植植えにすることで収量を確保することができました。大株を用いても必ずしも収量が増加する訳ではなく、小さな株を用いても効率的に増殖を行える可能性のあることが分かりました。

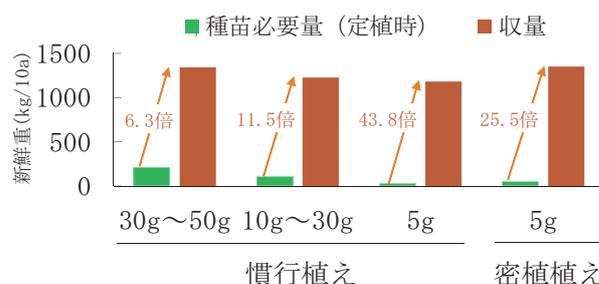


図3 種苗の大きさが収量に及ぼす影響

3. 実用化に向けた対応

今後もさらに研究を進め、本県に適合した栽培マニュアルを策定する予定です。

なお、カノコソウをはじめ新たに薬用作物の栽培を開始するにあたっては、出荷先と調整し、種子・種苗を確保すると同時に、規格に基づく適切な栽培を行うことが大切です。

（大和野菜研究センター 大谷 正孝）